全体会

実践報告Ⅱ

協同の力で地域づくり・仕事おこし

—別海町の場合—

吉野　宮子（別海厚生企業組合）

別海町からきました。別海町といえば、日本一広い矢臼別演習場があります。去年から厚生企業組合の理事長になりまして、企業組合をやりながら、また障害者の共同作業所であるスワンの家の理事長とか高齢者事業団の顧問とか、もう一つは別海町の共産党の議員という役割を果たしながら地域の皆さんの要求をまとめて何とか市民権を得るような、住んでいてよかったといえる、安心して暮らせる地域をつくりたいということで、およそ30年くらいの歴史を今回の報告の中でまとめてみました。私たちは最初からこういうものをこういうふうにつくりたいということではなくて、一生懸命やっているうちに、図（P34参照）にもありますが、地域のみんながいい町をつくりたい、そういうふうに思っているひとたちが集まってきて、それぞれ自分の能力や条件を生かしていける場所について一生懸命やっているうちにこのような図になるというか、今回報告して欲しいということでどのようにお話すればいいのかなといろいろ考えて遂にまとまったのがこの図です。これで見たところ本当に複雑ですけれども、整理しなから、どういう風な状況の中で生まれてきたのかという事を報告したいと思います。

演習場反対と酪農破壊を契機に

契機になるというか、地域づくりのいろいろな形があると思いますけれども、施設をつくる要求だとか、危険な箇所を直したいという要求だとか、環境が破壊されるのでそれに反対する地域づくりとか、また自治体が主導する地域づくりとか様々な個別の地域づくりがありますが、私たちはこういう物に当てはまらないで全くそのほかの部分で歩んできたなという感じがします。一番大きくその背景にあるのは、なんといっても矢臼別演習場という平和で暮らしたいという人達の気持ちや心を踏みにじって毎日毎日砲弾の音が鳴り響くような演習場があるということです。

そしてなんといっても第一次産業である酪農の問題が、先ほど太田原先生の報告の中で農協問題、戸数が減っているということですけれども、全くそのとおりで農業・酪農の問題が、行政が取り組めば取り組むほど、この年表の中にもありますが第１次産業改善事業とか第２次産業構造改善事業とか第３次までいき、そのあと新酪事業などというのが入ります。このような行政の大きな方針が入れば入るほど、農家戸数はどんどん減少していくわけですね。別海町でいえば、1960年に2538戸いう戸数がありましたが、いまは1200戸を切っています。そういうふうに戸数がどんどん減っていく、牛の頭数は増える、生産量は上がるけれども所得は減るという循環になっているわけですね。こうした第一次産業の歩みの中で、こんなことでいいのだろうかと、私たちの地域が本当に破壊してしまうのではないだろうかという心配の中でいろんな運動が起きています。こういったふたつの背景をやっぱり私たちはきちっとふまえていかなければならないと思っています。

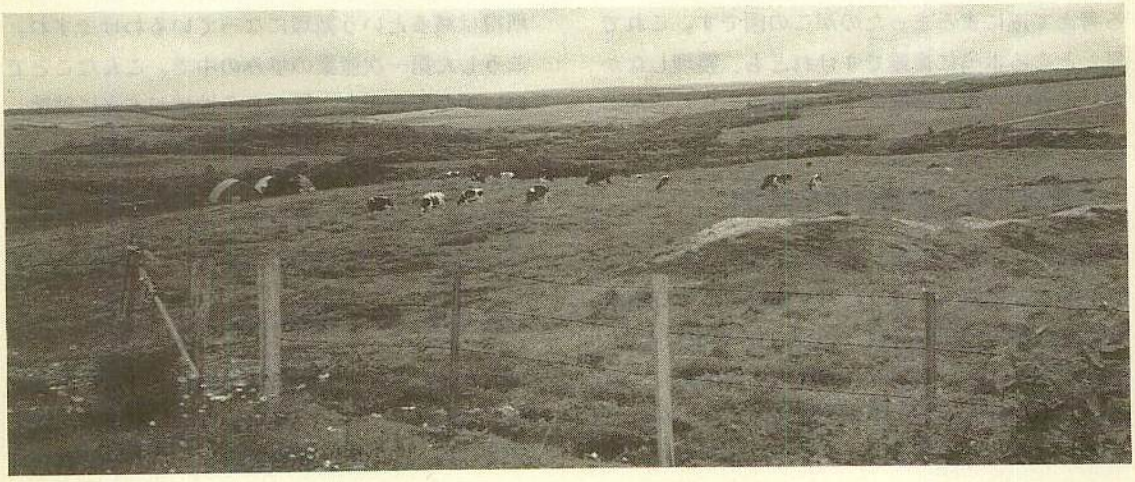
広くゆたかな運動の広がり

そうした運動に別海町は逆に恵まれたのかもしれませんけれども、ここにいらっしゃる山田先生をはじめ、この実行委員会のなかに入っておりま

す釧路教育大の三宅先生や衆議院の五区の候補になっておりました芝田重郎太さんなどがいろんな知識や知恵を与えてくれたわけですね。そういうなかで一つの発展方向というか、手探りながら絶対離さないと、失敗してもまた挑戦していくという地域の人達が頑張ってやってきたんだと思います。ですからこの図にまとめてみますと、平和の運動がある中で地域の先生方の教員組合や農民組合、新日本婦人の会、建設一般労働組合、これはあとの方でできるわけですけれども、平和を求める平和委員会と、こういった団体の中で、その都度集まってくると地域の状況が話し合われます。そして農業の破壊がこんなにひどい方向にいっているのはなぜかということで労農学習会が開かれていきます。この労農学習会もスムーズにいっているわけではありませんで、途中で、休んでいたりするんですが、自分たちはどう生きるのか、農民らしく生きるにはどうしたらいいのかといった話合いがされます。また新日本婦人の会の人達が当初73年には遊園地づくりとか74年には町立保育所を実現の共同保育所をつくるとかそういう運動はあったんですが、これはいってみれば短編、地域を変えていくというさっきの、一つひとつの問題での要求活動だったわけですね。こういう問題の経験はありますけれども、これができてしまえば、そこで行政側の主力になって、住民の本当に民主的な運営がなくなってしまうということに気づきました。

そういう中で、婦人の人達はちょうど教育問題で子どもたちが学校暴力だとか先生方が自殺をしなきゃならないとか、そういう教育問題が大きく出てくる中で、矢臼別に羊を飼おうという運動があって三宅先生や芝田さんが羊を持ってきて飼い、そしてその中で三宅先生などは各学校で手作りのバターをつくろうとかそういう運動をするわけです。新日本婦人の会でも羊の紬だとか、洗いだとか草木染めだとか、そういうことをやる中で私たちはすごく学んだわけですね。ということは、教育の破壊の現状というのは、子どもたちに今あるのは結論だけしかないと。朝起きてスイッチをひねると水が出る。ドアを開けると食べ物がたくさんはいっている冷蔵庫がある。スイッチをひねると掃除ができるという。

玩具にしても、自分たちがゼロの段階から工夫して結論が出るまでの過程の中で学び取ってきているものがなくなってきているんだなあということに気がついたわけですね。そういうことから行政への働きかけをやりながら手作りということの重要性、そして農業問題でも輸入反対とか添加物の入っている食品はだめとかそういうことを言っても実際にそれに変わるものがあるのかというとないわけですね。添加物の入らない、新鮮な、地域で取れるものを利用して、作り上げていこうという運動が広がってきて婦人の人達も喜んで参加



できるというふうになっていきます。

実践的な運動が実を結ぶ

そして企業組合の活動も始まるわけです。別海町では企業組合も13年の総会を迎えましたけれども季節労働者の人達に、毎年毎年同じ権利意識だとか制度の改善だとか、企業に申入れをするとかいろんなことをいいますが、現実にその人達が職場に返ると、２人３人４人と別れてバラバラの状態でまとまった意識の変革というのは本当に難しい状況におかれています。しかし年間200万か250万の収入でこの人達がいなかったら学校も立たない道路もつくられない、そういった重要な仕事をしながらこういった条件におかれているということを私たちは考えないわけにはいかない。とにかくできることからやっていこうということで高齢者事業団、企業組合の大友さんたちから指導を受けまして、高齢者事業団を設立するわけです。

そういう中でまた障害を持っている親の会の人達が共同作業所が欲しいと、養護高等学校を出たあと行き場がないと困っている人達がいてその人達と一緒になって行政に要請行動をして、古い家ですけれども借りて、そこに作業所を設立することができたと。そこでは私は考えるのですがやっぱり地域の産業と合うものでなければならない。そして地域で取れるものを利用して仕事をつくっていかなきゃならない。そこで当時も問題になっていました廃油手作り石鹸をつくることがどんなに環境にもいいし、共同作業所などでつくる仕事にしては本当に適したものでないかということで手作り石鹸を始めました。そしてこういう中で作業所に通ってくる子どもたち、大人もいますけれども、一番気になるのは、清涼飲料水をがぶかぶ飲むということですね。家にいれば自分の部屋にゴミ袋一杯にコーヒーの缶があると。そういうような状態の中から、飲むな飲むなと言ってもおさまるわけではありませんから、それに替わるものというと地域に一杯生息している、元気で、いってみれば化学肥料もやらなくても太陽の熱と土で育てられた野草があるわけですね。こうしたもの

右から赤石さん、川瀬さんご夫婦
吉野さんご夫婦とお孫さん

を野草茶として自分たちも飲んでいくことがいいんじゃないか。企業からの仕事でアイスクリームのヘラ入れなどやりますけれども時間をかけても本当に少ないお金しかもらえない。でもヘラ入れをみんなでやることでボランティアの人も来たらすぐ一緒にテーブルに座ってやれるということでこういう仕事もやっていますけれども、こうした仕事をやっていこうということでこれが成功して今年間100万近くの仕事を、みんなで楽しみながらやっているんですが、通所生は10人くらいで100万近くの仕事をすることができました。

そういう問題でもう一つはリサイクルですね。地域の人達が使わなくなったもの、残ったものを持ち寄って、それを利用できるものは利用する、売れるものは売る、改善するものは改善するといった地域のボランティアの人達と一緒になってやることができました。これが今地域に波及しているわけです。

もう一つは学童保育の問題でこの運動も何年も前からありましたけれども、建設一般労働組合の方からの指導もありまして、地域に学童保育をつくっていこう。やっぱり誰かがやっていこうという決意というか、やりきる人がいないとなかなかできないわけですが、今日来ている赤石さん方が住んでいる西春別の地域にチェリーハウスというのを町の助成をもってつくることができました。この運動も東の考える会ができて、この間の町長交渉では自主運営でやっていくことでいいんじゃ

ないかということで補助をもらって自主運営をするように作り上げてきています。

共同体が生まれる

話があちこち飛びますけれども、もう一つは企業組合の中から、毎年学習をしている中で、いろいろな制度があっても、本当にこれを使ってくれる企業はなかなかいない。自分たちで企業をつくろうということで基礎工事にいっている人達が——自分たちの技術を16年間基礎工事をよその親方についてやってきたんですが——自分たちでやろうという話になりました。その人はたまたま片腕がない障害者の人でしたが、3人が集まって共同でやろうと、その他はパートの人達で今7人でやっています。この障害を持った人に対する生活資金という制度があるわけですね。別海町には障害を持っている人達への対策というか、全くないわけですね。社協に私たちも一緒に行きましたが、役場には人数分に合った障害者を雇用しているから問題はないんだというような答弁しか返ってきませんでした。今回この制度をぜひ使わせて、限度額400万円ですけれども、貸し付けを要請して今の段階で決定を待っているわけですが、別海でもこのことを認めさせてこの制度を利用して立ち上がって自分たちで経営していくと、そういうふうに実践するという方向にずいぶん頑張ってきたと感じています。

図の丸い二重の部分は、行政と半分半分になっているところですね。右端の点線で囲っているところはこれから私たちが作り上げていこうというものですが、福祉サービス事業協同組合、これは仮の名前ですが、今、町の方でも全道的、全国的にも付添い看護婦さんは例えば未亡人の人しかできないというような労働条件におかれています。病院にずっと泊り込み、病院での生活をしているという条件がありますから、独身の人しかできないという状況にありますのできちっと組合をつくれば、二交代とか三交代とかして普通の労働条件で、特殊ですけれどもやれるような状況になっていくと思います。また高齢者10ケ年計画でやっていますがデイサービスだとか食事サービスだとか、そういう問題にも関わっているし、もう一つ大きな問題として病院とか特老とか、そこでの洗濯事業とか寝間着を縫う製縫の事業とかそういう物は全部釧路とか帯広とか遠くに仕事を発注しているわけですね。でも洗濯なんか機械と場所さえあれば協同の力でいくらでもできるわけですね。こういった別海町で暮らす人々の、生活をしていくために必要なものを別海の人達がみんなで協同の力でやったらどんなにいいかなという事を感じるわけですね。今の段階でちょっと話し合っていますけれども、まだ具体的にはなっていません。

あともう一つは地域の物産加工センターをおいて、新婦人で取り組んでいるベーコンだとか味噌づくりですね。今日実物をもってきているわけですが、お昼休みにどこかの場所を借りまして見ていただきたいと思います。地元の北海道でできた豆を使って味噌をつくると、添加物の入らない本当においしい味噌ができるわけですね。そういった加工したものを売ることができるような物産店

牧草地の草刈り作業

をつくりたい。みんなが憩いの場として集まってきていろんな話合いができる、そういう喫茶店みたいなものをつくっていきたい。それが高齢社事業団だとか共同作業所のスワンの家だとか新婦人の人達の運動とか、一体となって一つの結節点というか、共同作業所のスワンの家にはボランティアの人達が、毎日3人4人と来ますけれども、気楽に集まって話合いができる。作業所の指導員をしている方もどんな人でも対等平等な関係でそこ

が運営できるということが突然来た人にもビンビンと感じられるような状況で運営しています。ですから地域の人達がお年寄りも含めて集まってきて話し合ってよかったねと言って帰れるような拠点が地域全体に広がっていくようにしたいと思います。

学習の積み重ねの上に

そういったまるごと民主的な地域づくりをしていきたいと、思っております。そのためには地域の産業と経済と文化というものを総体的に見ていかなければならない。今までの行政は縦割りで、農業なら農業の問題ばっかり追求されてきています。しかも生産を上げる、頭数を増やす、機械化する、そうしたら生活が楽になるっていうふうな、いってみれば単純な機械化というか、農業をそっちのけにした機械構造の中で考えられているようなものでは町全体が本当に生きていて良かったという町にはならないということを、別海町の酪農の未来を考える学習会の中ではっきり数字で表れてきているわけです。たくさん注ぎ込んでも、経費がかかれば所得は少ないんだということを、小さくても経費をかけなければ所得は大きいんだという。全てがそうだと思います。今の状況の中で中小企業でもどんどんと大きくなっていく段階で倒産しては企業が合併されたり合同されたりするという状況の中で、この経済のしくみは全部一つなんだというふうに私たちはこの期間の中で学習してきました。ですから、自然を守っていくためにも、全体の構造の中でやっていかなければ、いびつな矛盾が必ずでてくると、感じています。

別海でもただ無我夢中でやってきて、今回このような学習会があることによって、今までの30年の歩みを一つまとめることができたということで、今日参加させていただいてよかったなと思っています。北海道中、日本中でどこの町でもこうしたとりくみが広げられていくことが、民主的で安心して暮らせる平和な世の中で暮らしていく地域を自分たちでつくっていくんだということにつながっていくのではないかと考えています。どうもありがとうございました。

参加者の感想

竹沢竜治　江別建設企業組合

「協同」問題に関して全体報告で認識を新たにしました。この問題での協同の広がりと、横のつながり、協同の大切さを思います。
実践報告石巻、別海の地域を中心とした事業活動はたいへん感動した。特に別海の地域における、あらゆる大衆組織と結び付きの中での活動はこの段階に達するまでの、その指導性、粘り強さ、計画の遠大性にただただ感服致しました。今後の健闘を期待します。
分科会においてはあまり知らない、他協同組合の実情報告をきいて、その内情をある程度理解できて相互理解の交流ができたと思います。今後の計画を期待し、実行委員会の努力に感謝を申し上げます。

横山哲夫　船橋地域事業団

北海道で初めての「協同」集会として成功であったと思う。
北海道という広大な地域で様々な協同が多様な姿で発信されていることが十分に感じられた。まず、情報の共有化から始めて、地域の人々に正しく伝えていくことの大切さを感じました。
労働者協同組合の可能性は、今北海道で熱く求められているのではないか。
○実行委員会の皆さんの努力に感謝します。

協同の力で地域づくり仕事おこし　別海町の場合は……

青年　研究者　職員など　農民　職人・労働者　主婦　政党

平和に生きる権利　　矢臼別共闘

平和委員会 58年結成

教職員組合 67年から参加

農民組合 65年結成

民教 68年結成

新日本婦人の会 68年結成

建設一般労働組合 80年結成

提携

バラサンの会
土地を守る
自然保護
学習会など

教育を語る会 70年～

労農学習会 71年～74年

泉川地区学習会

税金勉強会

漁民にもひろがる

労農学習会再建 81年～

民主商工会 88年

毎月1回マイパース酪農実践交流会

各地にひろがる

有限会社杜川瀬牧場 91年

矢臼別を守る会 92年

全国各地と交流

矢臼別活動者のつどい 92年～

教育を語る会再建 92年～

合同教研集会

手づくりサークル（羊毛つむぎ、織り、草木染め、ベーコン、みそ、ケーキ、パン、クッキー、ヨーグルト、牛乳豆腐、野草茶）

早朝保育 アサガオ会 93年（施設利用）

企業組合 78年

高令者事業団 88年

障害者共同作業所スワンの家（リサイクル、農地手づくり石けん、野草茶）89年

道東勤医協友の会 75年

学童保育所（西部）チェリーハウス '91年

SK技術 93年

生きがいセンター

栽培農民

食品加工センター 92年

精神障害者親の会

地域ボランティア

障害者友の会

出張検診 医療相談

学童保育を考える会（東部）93年

東部にも学童保育所を

遊園地づくり 第1号 '73年

町立保育園（0歳児保育）'74年

福祉サービス事業協同組合（介護、食事サービス、洗たく）

地域物産加工センター（つけもの、みそ、山菜加工、保存食など）

物産店

喫茶店

共同作業所（石けん、野草茶など）

厚生施設

生活館

平和もちつき 12月

平和盆おどり（全国各地1,000人）8月

酪農の未来を考える学習会 4月

母親大会 11月

地域新聞等で町民へ知らせる

要求を具体化、自治体へはたらきかけ

4つの柱
1. 産業・経済
2. 自然
3. 福祉
4. 文化

総合的にみつめて

5つの原則
1. 要求に根ざし　一致で行動
2. みんな対等平等で組織、運営
3. 信頼される仕事をする
4. 要求を行政に反映させる
5. 地域にしらせる